2023年5月21日　主日礼拝

説教題「互いに、主に向かって」エフェソの信徒への手紙５章19～20節

主任牧師　加藤　誠

「むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」（エフェソ5章18b ―19節）

教会の礼拝に初めて参加された方が戸惑われることの一つに「賛美」があると思います。普段の暮らしの中で「みんなで歌を歌う」こと自体がまずないですし、独りでいるときに好きな音楽を聴いて鼻歌を歌うことはあっても、大きな声を出して歌うことはなかなかないものです。なぜ、私たちは礼拝で「賛美」するのでしょうか。「賛美」にはどのような意味があるのでしょうか。

私が学んだ大学では昔から歌い継がれた寮歌があり、体育会系の部活動の新入生はまず寮歌を暗唱させられました。最初はいやいやでしたが、肩を組んで寮歌を歌うことで熱い一体感を経験できることを学びました。つい先日のテレビの番組で、秋田のプロバスケットボールチームの応援にかけつけた秋田県民の方たちが大きな声で県民歌を歌う姿に感銘を受けました。歌にはそのように人びとの一体感を高めて心を高揚させる働きがあります。礼拝の賛美も礼拝参加者の連帯感を高揚させるために歌うのでしょうか。

礼拝の賛美は「神をほめたたえる」ものですが、「ほめたたえる」というヘブライ語には「神を大きくする」という意味があります。「神を大きくして、自分を小さくする」。それが神賛美です。私たちが気持ちよくなるため、連帯感を高めるために歌うのではないのです。目に見えるものに心動かされている私たちが、見えない神の恵みに目を開かれ、気づかされ、神の恵みを「大きく」覚えて大切に受け取り、その神賛美をもって礼拝からそれぞれの場所に派遣されていくために、私たちは礼拝で共に賛美をささげて、神を「大きくする」のです。

礼拝の音楽奉仕者は、自分が演奏したいから、歌いたいから奉仕をしているのではありません。礼拝に参加した会衆一人ひとりが神を賛美し、神の恵みを大切に受け取り、神賛美を携えて礼拝から出かけていくことができるように奉仕をささげるのです。ですから、教会音楽において一番大切なことは、礼拝に参加した一人ひとりが神をほめたたえ、神を大きくする信仰を受けていくことなのです。

今朝、ご一緒に開いたエフェソ５章には「詩編と賛美と霊的な歌」という三種類の賛美歌が出てきます。この三つはどう違うのでしょうか。まず「詩編」は旧約聖書の詩編のことです。旧約のイスラエルも、新約のクリスチャンたちも、礼拝の中で詩編をよく賛美したのです。教会の中には「詩編だけを讃美歌として認める」グループもあります。次の「賛歌」は、新約のクリスチャンたちの教会で生まれたキリストをほめたたえる賛美の歌です。旧約聖書の詩編にはない賛美であり、「キリスト賛歌」と言われて、例えばフィリピ２章６節以下が有名です。三つ目の「霊的な歌」の意味するところは正確にはわからないのですが、「霊的」とは「肉的」

の対義語です。「肉的＝人間がうまれつきもっている性質、傾向」とは異なる「霊的＝神の愛や勇気、知恵、希望につなげられて生まれるもの」を言います。自分の中から自然に出てきたものではない、神さまから与えられたとしか言いようのない、自由さ、やわらかさ、勇気、明るさなどを「霊的」ということができるでしょう。

例えば、旧約聖書の「詩編」から教えられることは、神にささげる祈りは感謝や喜びだけではない…ということです。不安、恐れ、憤り、正義を求める思い、悔い改めなども、旧約の人々はそのまま神さまにぶつけました。その意味で言うなら、私たちは礼拝堂に感謝や喜びだけでなく、いろいろな葛藤や不安、怒りなど、自分では処理できない思いを携えてきて良い。そのまま持ってきて良いのです。不思議なことに、私たちが正直に自分の思いを主イエスに差し出していくとき、神さまはその私たちの葛藤や不安を取り扱ってくださり、そこに神さまの霊的な力、神さまとつなげられることによって与えられる不思議な力を注いでくださいます。そして、その時、私たちの心にキリストによる「新しい賛美」が与えられていくのです。

また今回、エフェソ５章の短い言葉の中で「詩編と賛美と霊的な歌を語り合い…なさい」と書かれていることに考えさせられました。この「語り合う」は正確には「互いに語る」と訳される言葉です。「主に賛美する」前に、まず「互いに語り合いなさい」とはどういうことなのでしょうか。

実は旧約のイスラエルの人々は礼拝の中で「詩編」を交互に朗誦し合いました。いわゆる「交読」と言われるものです。御言葉、賛美、告白を届けあうのです。自分が語るだけでなく、聴く側に回るのです。讃美歌というと私たちはついメロディーに心引かれがちですが、それよりもまず歌詞に込められた賛美や告白が大切なのです。歌詞の意味を覚え、そこに込められた信仰や祈りを届けあう。そういう意味では、礼拝は「互いに語り合い、それぞれの証しを届けあう要素」が大切であること覚えたいと思います。例えば、礼拝で教会のメンバーの祈りに触れることは大きな励ましです。この数年間は新型コロナ対応のために礼拝も短縮バージョンで、牧師が進行役も祈りも説教もしてきましたが、バプテスト教会らしく、信徒が祈りなどを担うプログラムに戻していきたいと思っています。

また「互いに語り合う」ということで、以前の教会で小学生５年生のＫちゃんがバプテスマを受けたときのことを想い起します。Ｋちゃんの信仰決心のきっかけは、いつも礼拝の時にすぐ近くに座っているＭさんというおばあちゃんの存在でした。Ｍさんは物静かで言葉の少ない方でしたが、Ｋちゃんにとっては毎週礼拝でその姿を見ると励ましをもらう「信仰の友」だったのです。静かに礼拝をささげるＭさんの姿が、Ｋちゃんの心に神さまに向かう信仰を届けてくれたのでした。

私たちは一人では信仰を保てません。誰かの祈り、賛美、そして信仰の言葉に触れる中で励ましを受けて、毎日、神さまへの信仰を新たにいただいていくのです。「互いに」キリスト告白や祈りを届けあう交わりを大切にしていきましょう。そして、「主に向かって賛美をささげる」礼拝を心込めて共にささげていきたいのです。